

13 ザ・テンプルトン・タッチ

筆者はニューヨークに駐在していたとき、セールスアナリストとしてテンプルトン卿 (Sir John M. Templeton) を担当していたことがある。思い出すのは、必死にレポートを書き、初めてバハマに訪問したときのことだ。涼しげな服装に身を包み、にこにこ明るい笑顔でテンプルトン卿が現われた。「あ、テンプルトンだ!」と思う間もなく、「John Templeton」と手を差し出された。胸を借りるつもりで自分の書いたレポートを説明する間、終始、若造アナリストの話をまじめに聞いてくれた。

翌日からニューヨークのオフィスに、彼からの質問がいくつも届いた。どんな相手の話でも心を開いて耳を傾ける。そして、納得できるまで徹底して調べる。氏の生来の真摯さと、良い銘柄を探したいという仕事に対する情熱には頭が下がる思いをしたものだ。

本書で紹介している1982年の予言はきわめて興味深い。60年代半ばから長いボックス相場が続き、誰もが株式市場のパフォーマンスに落胆し、株式市場の存在さえ忘れそうになっているときの「大予言」である。しかし、よく読んでみると、現在の日本の

株式市場の状態と非常に似ているのではないかと思う。

人よりもずっと長期の視点でマーケットを見ると、見えなかったものが見えてくる。相場金言集もひとつずつ、心に刻みたいものばかりである。

テンプルトン卿は2008年、逝去された。まさに「巨星落つ」である。1990年に本書の原著を執筆していたときに贈呈してもらった『ザ・テンプルトン・タッチ (The Templeton Touch)』(William Proctor, Doubleday) は私にとって宝物である。心から「冥福を祈りたい」。

35年で61倍

現在の投資の世界において、おそらくジョン・M・テンプルトンほど神格化された人はいないのではないだろうか。1990年11月、78歳になる氏は、投資の分野で半世紀の実績を持つ。

1954年11月に設立されたテンプルトン・グロース・ファンドの一株当たり純資産は、89年末までの35年間で61倍 (キャピタルゲイン分配を再投資したとする) になっている。この間、ニューヨーク・ダウ工業株平均株価は7倍になったにすぎない。

仮に、設立時に1万ドルを投資し、すべての配当金とキャピタルゲイン分配を毎年再投資

したとすると、89年末の資産は128万ドル超へと増加したことになる。これは年率15%の成長だ。同期間の生計費の上昇は4.7倍であったので、いかにこのパフォーマンスが素晴らしいか知れよう。

78年設立のテンブルトン・ワールド・ファンド、81年設立のテンブルトン・グローバル・ファンドのパフォーマンスも同じペースである。設立時の1万ドルの投資資金が89年末には、それぞれ7万ドル超（年率18%弱の成長）、3万5000ドル超（同16%強）へと増加している。強気相場でのパフォーマンスの良さもさることながら、特に弱気相場において値下がりを免れた上位に、常に氏のファンドが入っている点が特筆される。

このような運用を可能とした秘密はどこにあるのだろうか。ジョン・テンブルトンの半生を綴った伝記『ザ・テンブルトン・タッチ (The Templeton Touch)』、および『グローバル・インベストイング——ザ・テンブルトン・ウェイ (Global Investing: The Templeton Way)』を参考にしつつ、氏の半生とその投資哲学を探ってみよう。

テンブルトンの半生

ジョン・M・テンブルトンは1912年11月29日に米国テネシー州のフランクリンという小さな町に生まれた。父親のハーベイ・テンブルトンは学歴は乏しかったものの弁護士業を営んでいた。しかし、人口2000人に満たない町では、とても弁護士業のみでは生活でき

ず、綿糸関連の零細事業などにも手を出していた。

1930年、ジョン・M・テンブルトンはテネシー州を飛び出し、エール大学に入学をする。その後、1934年に英国オックスフォード大学へと進学をしている。

折りからの大不況の最中、彼はほとんどの学資を自分で稼がなければならなかった。この苦学の経験を通じて、テンブルトンは「時間とエネルギーの管理術」を身につけていく。彼は、常に、本、書類などを大量に持ち歩き、少しでも時間が余るとそれらを読むなど、1分たりとも無駄にすることはなかった。

1日15時間にも及ぶ勉強と仕事をしつつ、同時に1日7時間の睡眠を欠くことはほとんどなかった。十分な睡眠は彼のエネルギーを保つために必要な条件であった。このようなライフスタイルは今も変わるところはない。

オックスフォード大学を卒業後、彼は7カ月にわたる世界旅行に出ている。それもほとんど無銭旅行に近いものであったようだ。1936年、オリンピック開催中のベルリンを振り出しに、欧州、中近東、インド、中国、日本など、実に27カ国を回り米国へ帰国した。この経験は、彼の視野を大きく広げ、その後の国際投資の基盤となった。

1937年、結婚と同時にニューヨークの証券ブローカーに就職する。だが、3カ月後ダラスの地震調査会社に財務担当秘書役の地位を提供され転職をした。

1939年、彼は大不況であえぐ米国経済の回復に強い自信を得た。欧州で戦争が勃発し